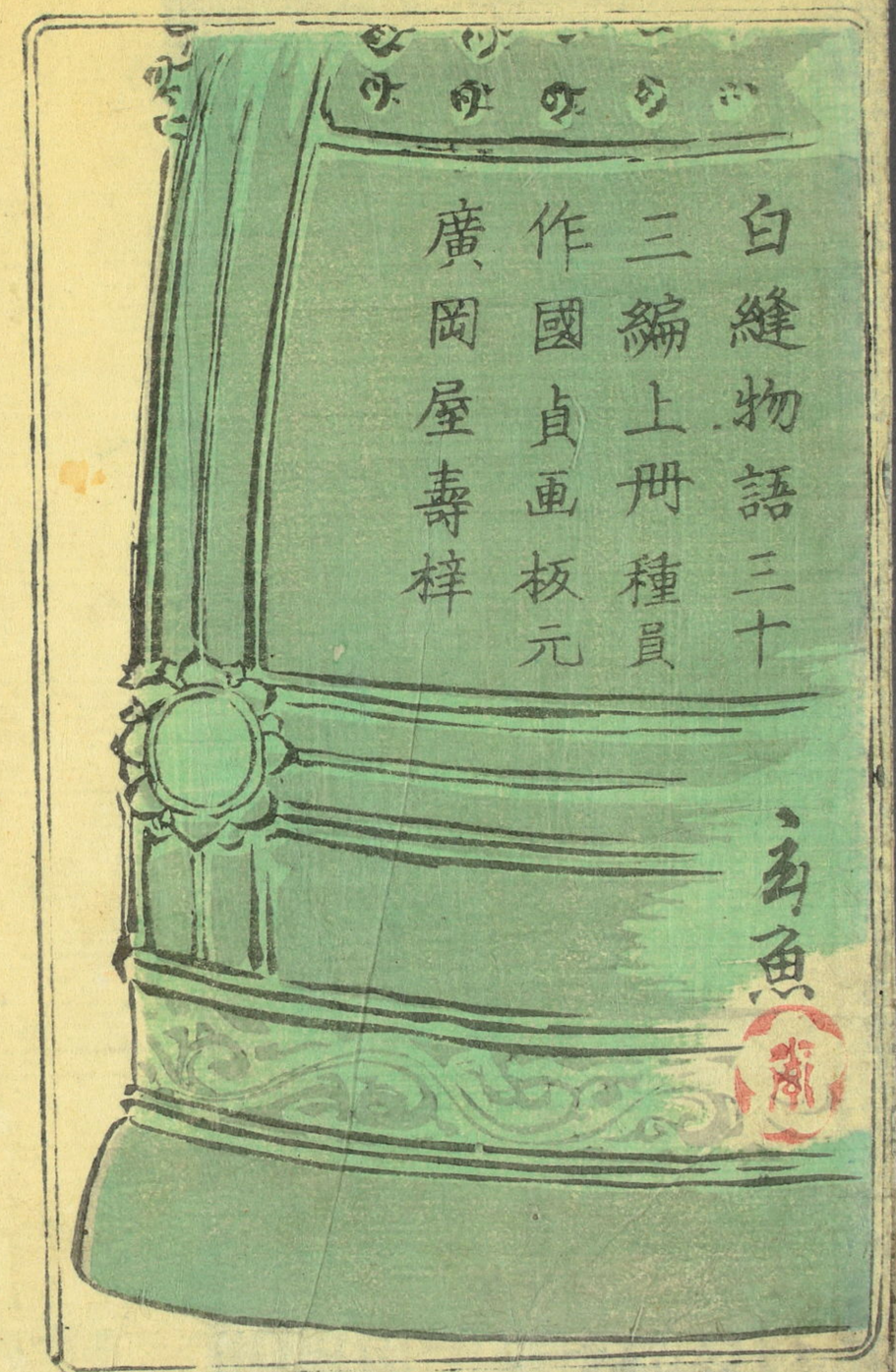
へ13
3162
17

白縫譚
三十三編
種員花
國貞画


白縫物語三十
三編上冊種員
作國貞画板元
廣岡屋壽梓
南魚

志ら
如意
作題曲亭馬琴
三十三編上
牡丹
種員紀
國貞
重
三十三編下

門へ 13
3162
巻 17

赤い恵比寿
三十三間の下

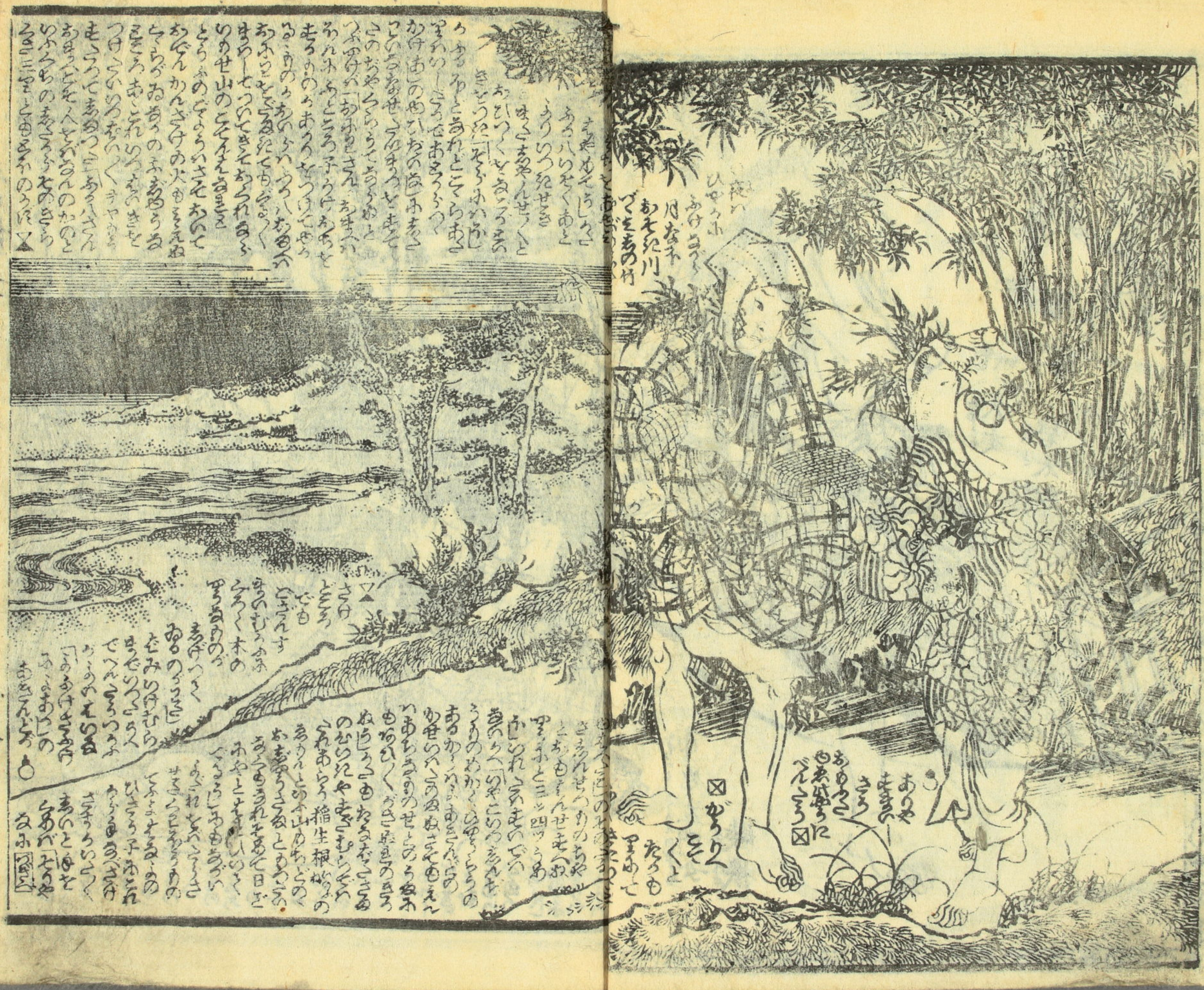
廣重画

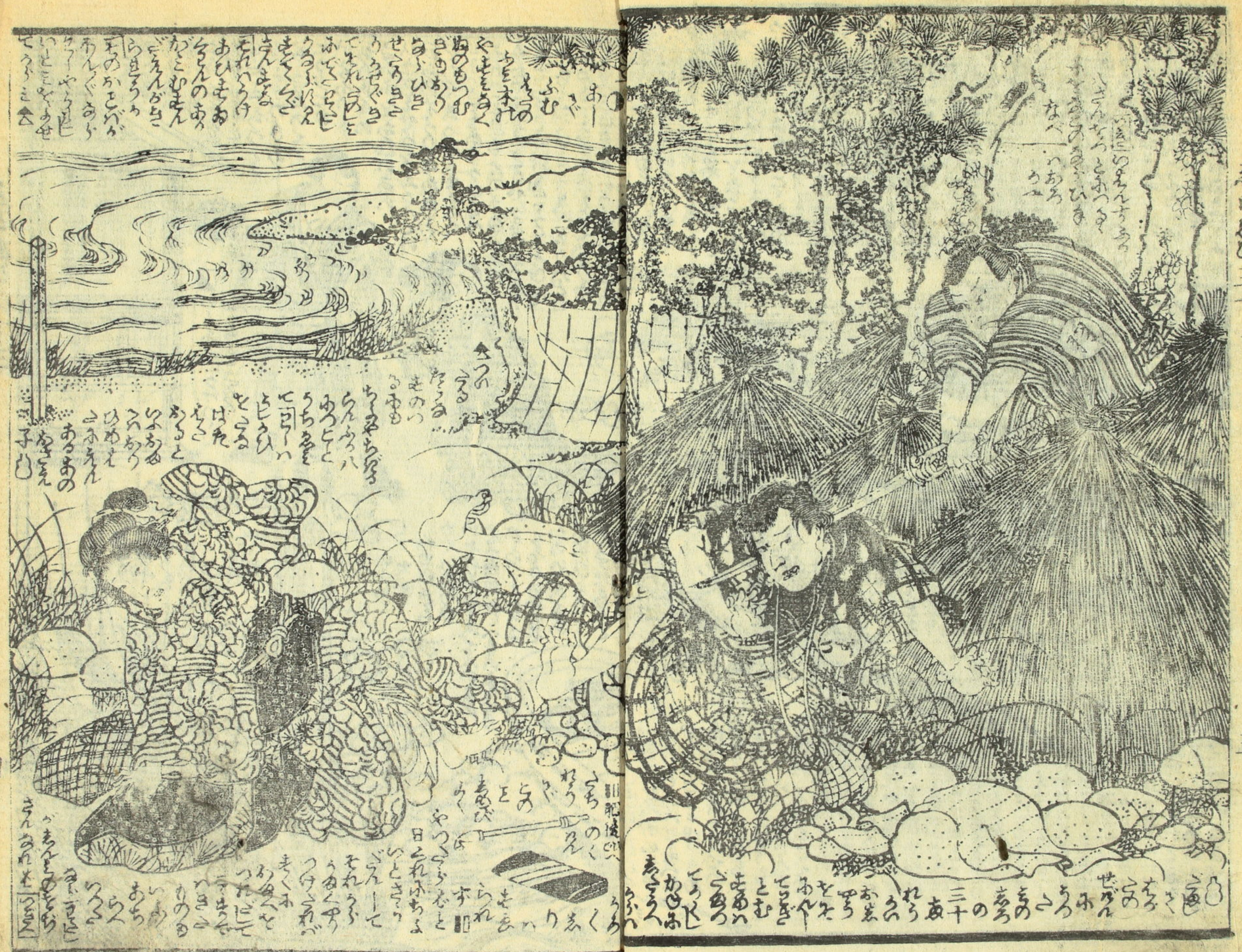
昭和九年十月二日

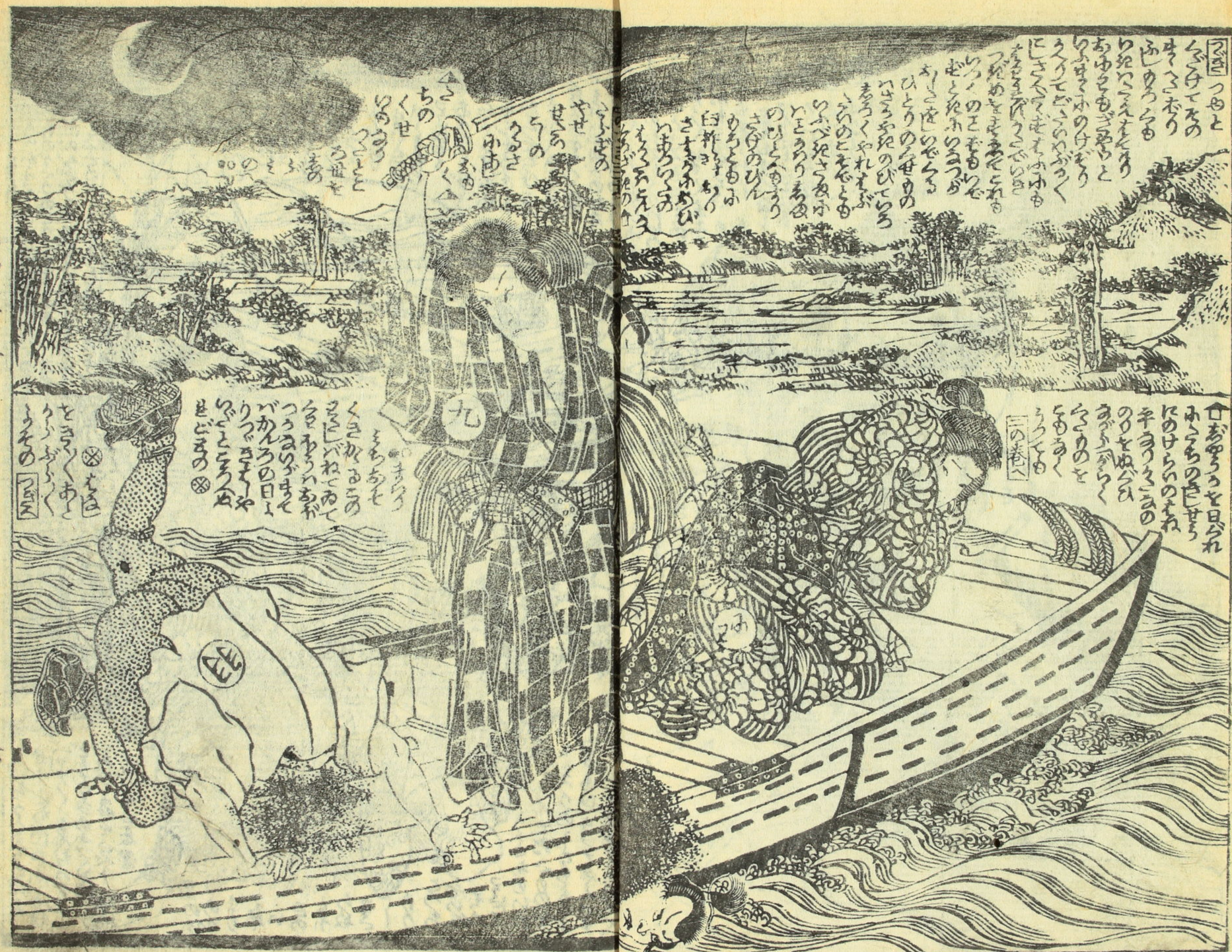
一人息弱体の狂歌行もつゝ潰。こゝ体美しくて咲ふぐき所あり。狂という名を何と心得うるゝ。天明風調こそ狂哥うれと。論なてかゝるゝ。歌舞妓狂言と号ちせる。滑稽場を土とせず。愁嘆の利。踊躍の上手にあるぐれい魅令と貴重ぬとも。難じさうハ是ゝる。勝栗毛八笑人の類そこそ。戯作ともいふべきふ怪談や人情本ふ戯と多所ハ帝ゝ。今ハ近頃可咲のハ弥盛見て彩色も幽寂をとゝめる闇の引出し。漂々所が口重ふも威勢ゞ有て可とゝの注文戯字の論を誰ゝハとらん。按ふに古く狂歌とゝハ自己歌を卑下しゝる語。戯作も文学研究の間ふ鬱散の戯作と云意とゝる時ハその体と指ゝハ非ず。揚枝と称て黒文字を用ひ茶屋茶ゝ船頭ゞ酒肴勧むることを陳謝あるゝ。草冊子も菊地と目け。實ハさゝゝぬ物語と。ゝゝぬひゝゝゝゝとゝのゝどゝそこゞ戯作と外ゝめたまゝゝぬ。ゝゝ取立こそ有ゞゝれ

校者 柳亭種彦述

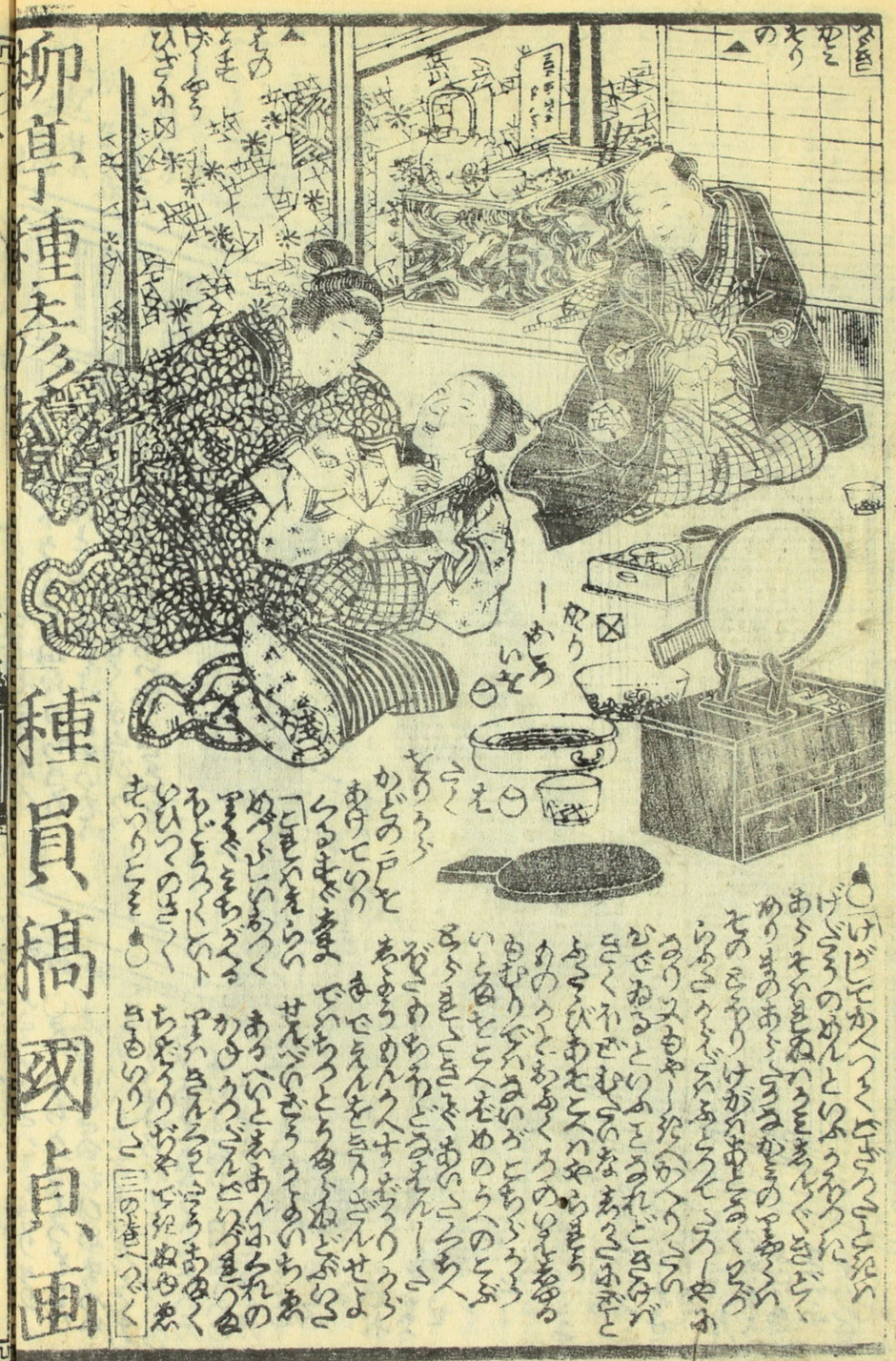
大友
岩太郎
市原左門女
綾機



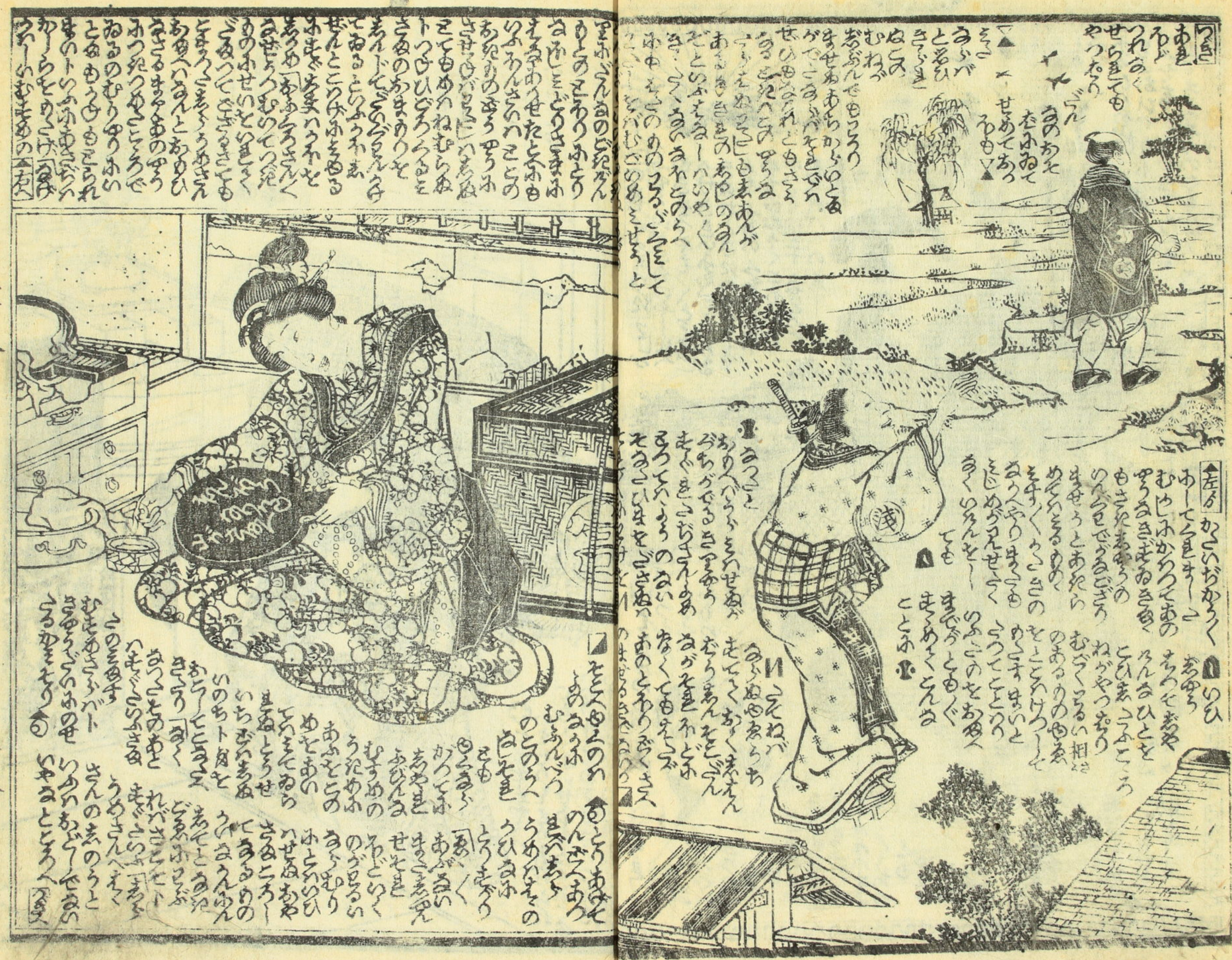


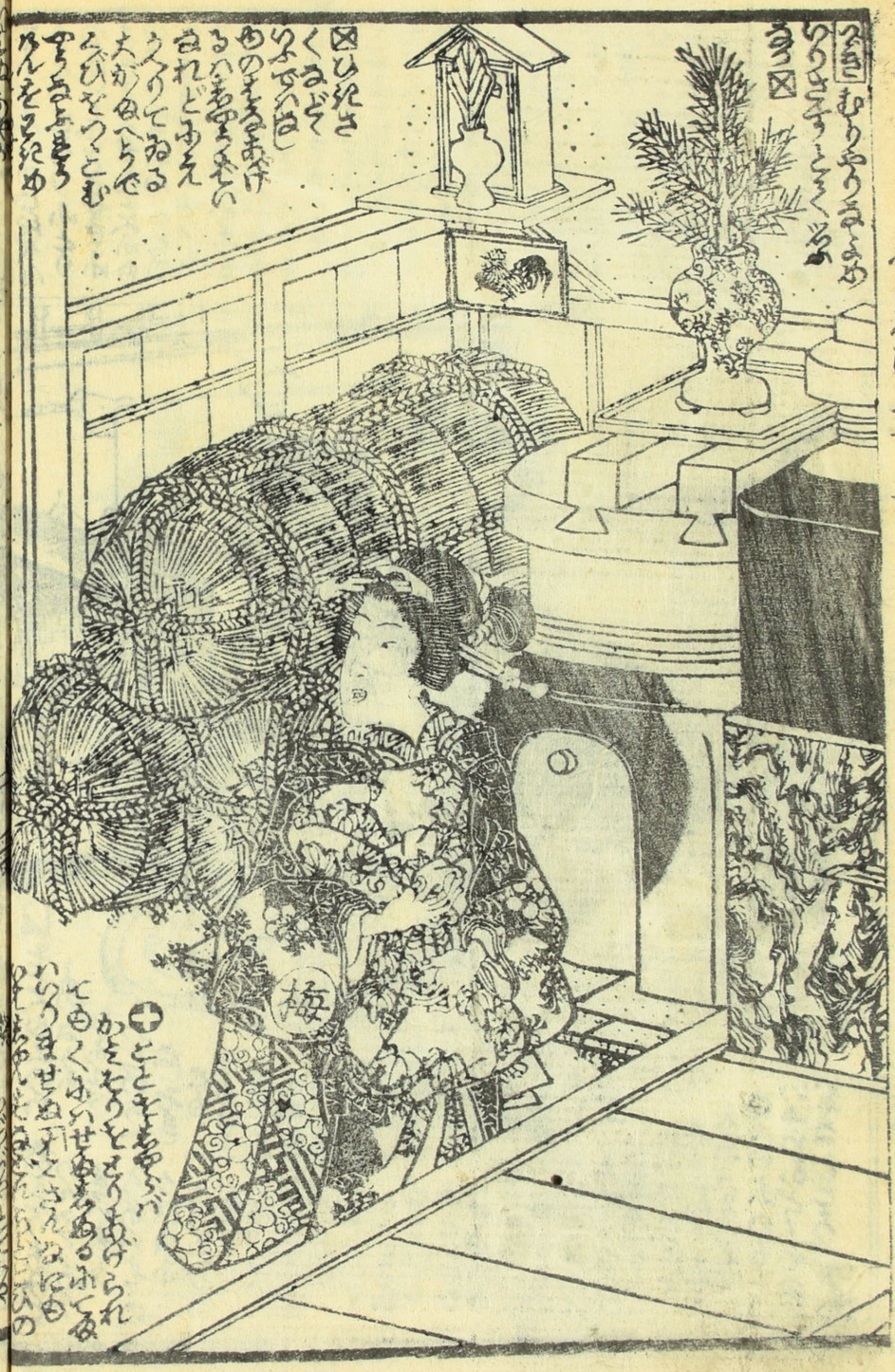


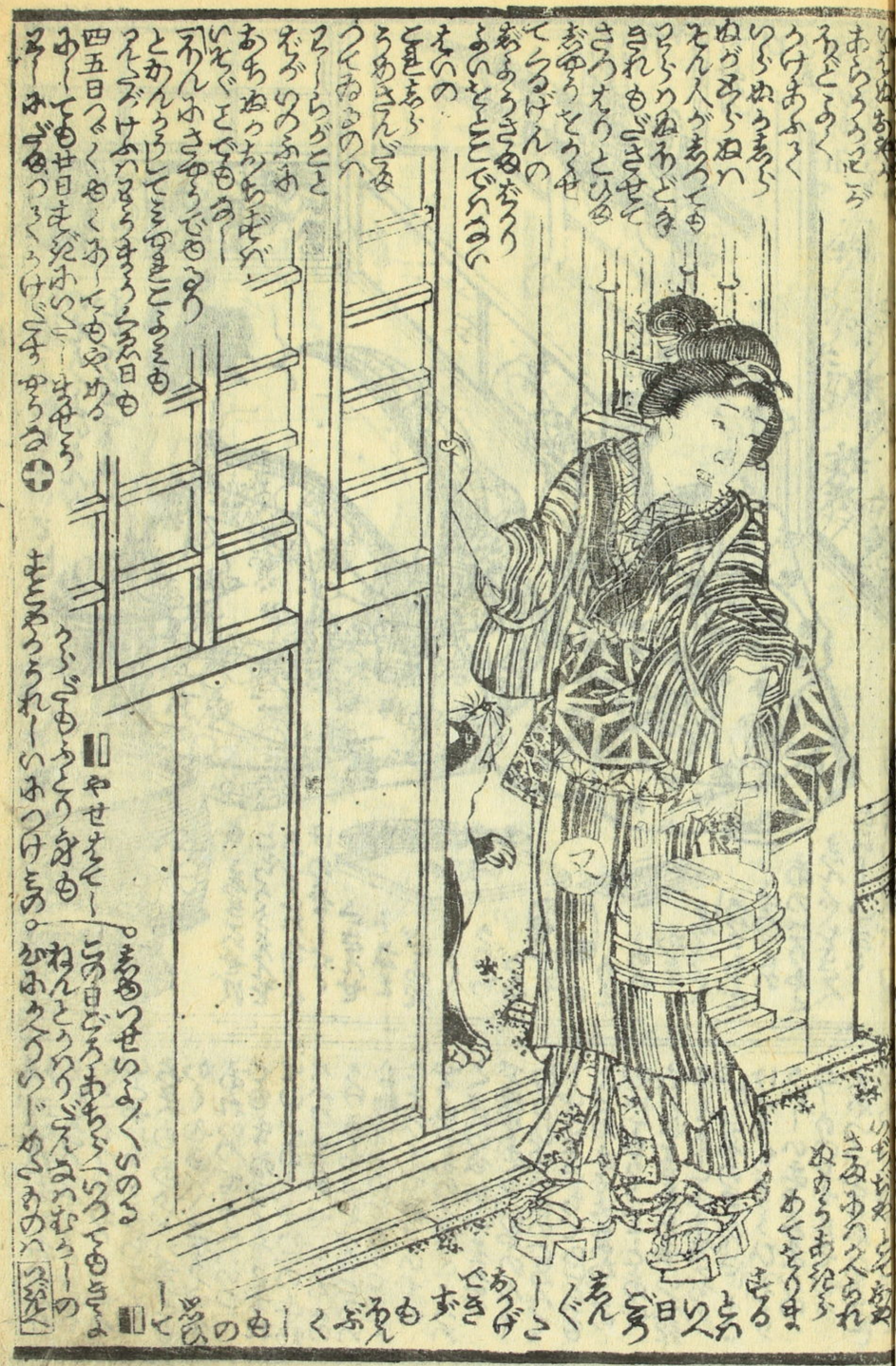
九

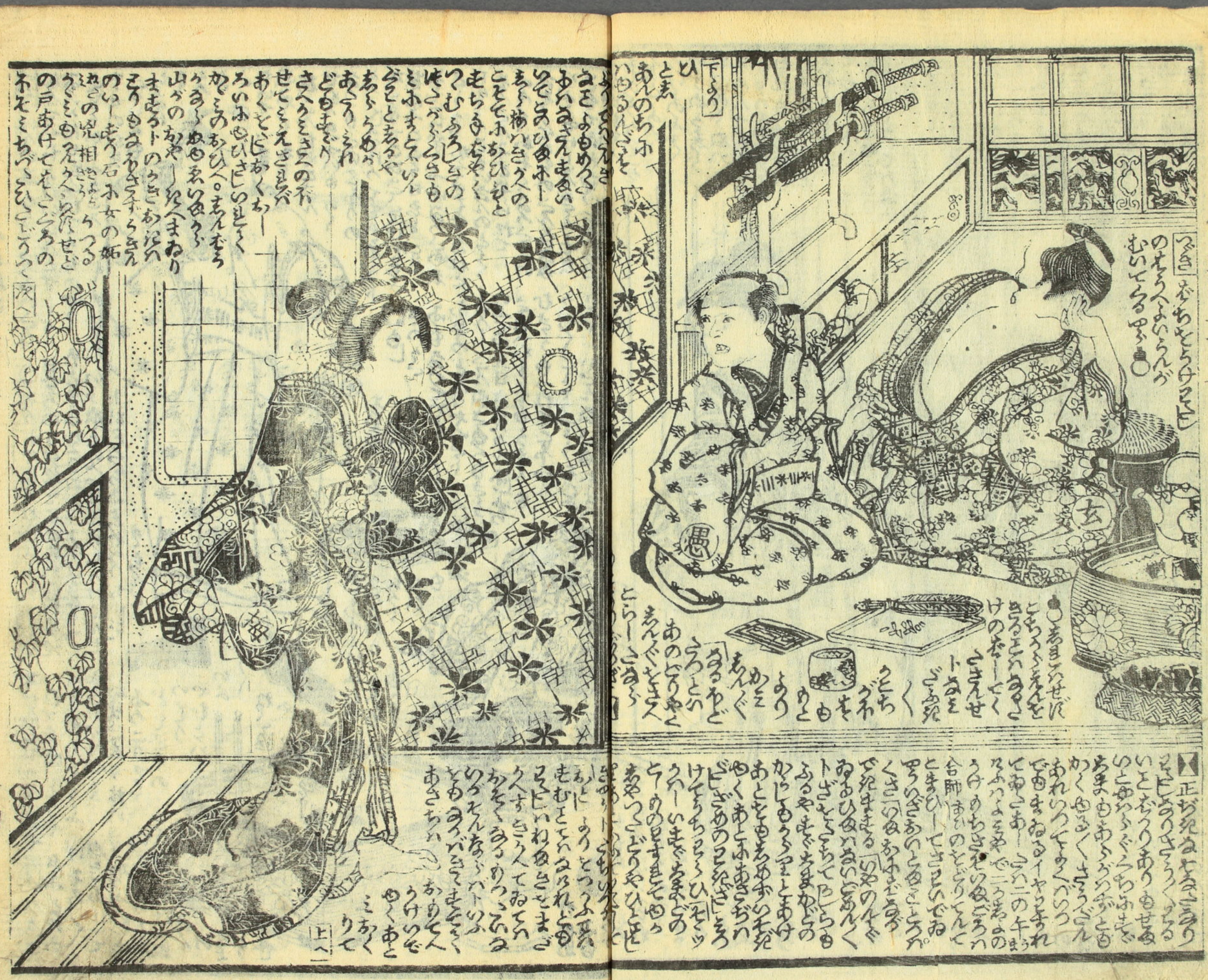

卯亭種夫作
種員稿國貞画

三
三の巻ぶかのをつぎ
青柳春々助年正


浅


梅





つぎ　おちとうけうとビのもうくよいうんがむいとるゆふ

下ろう　ひとあんのちふいもるんぐさを

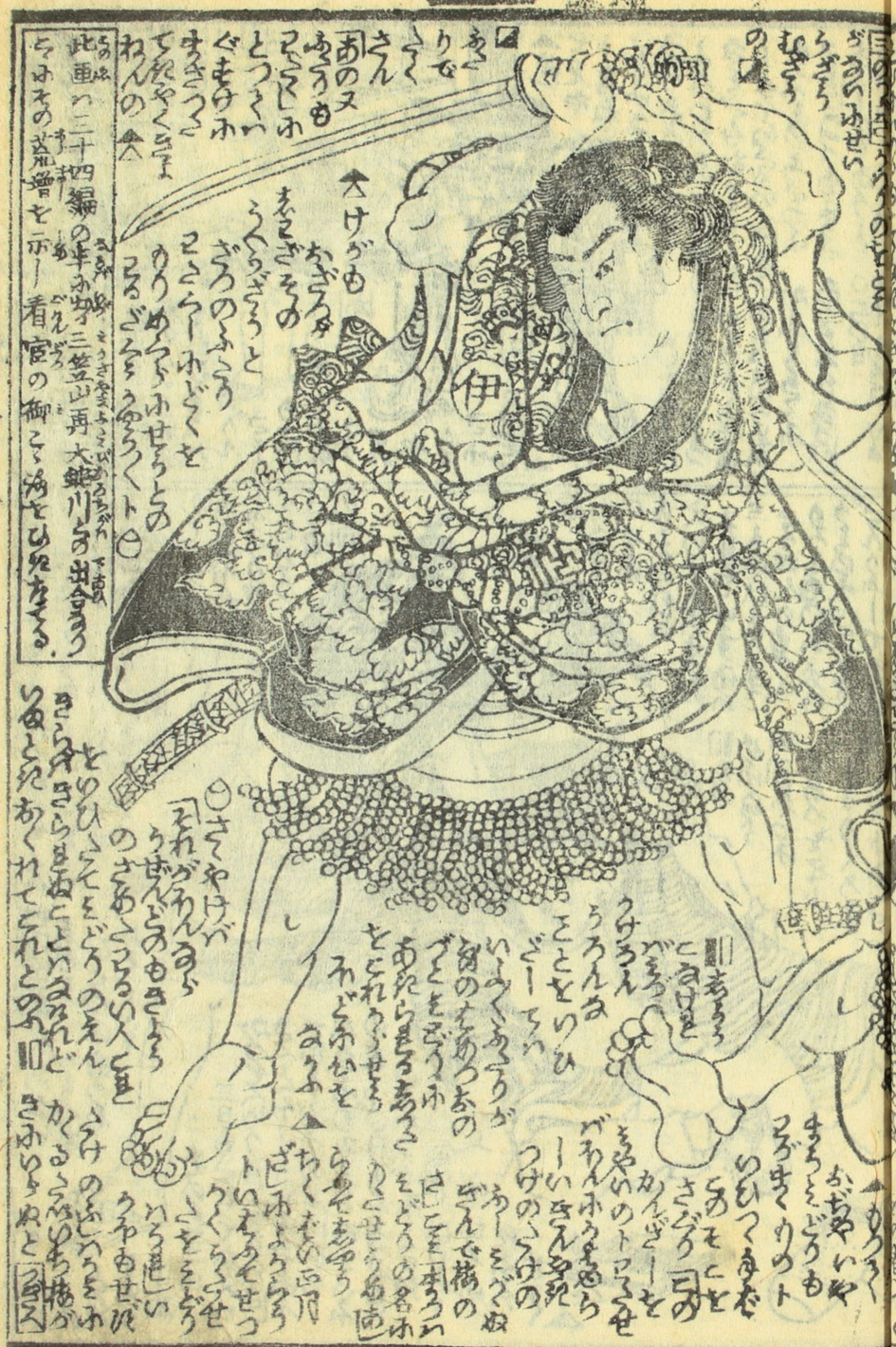
○あまこのせびとちろうくえんをきるとこいあるさけのおーーてくときえせトねをごふ死くとちぐわをもものとありかとんぐもりとあるやどろとのあのどりやとえんぐもきえとらーーさあう

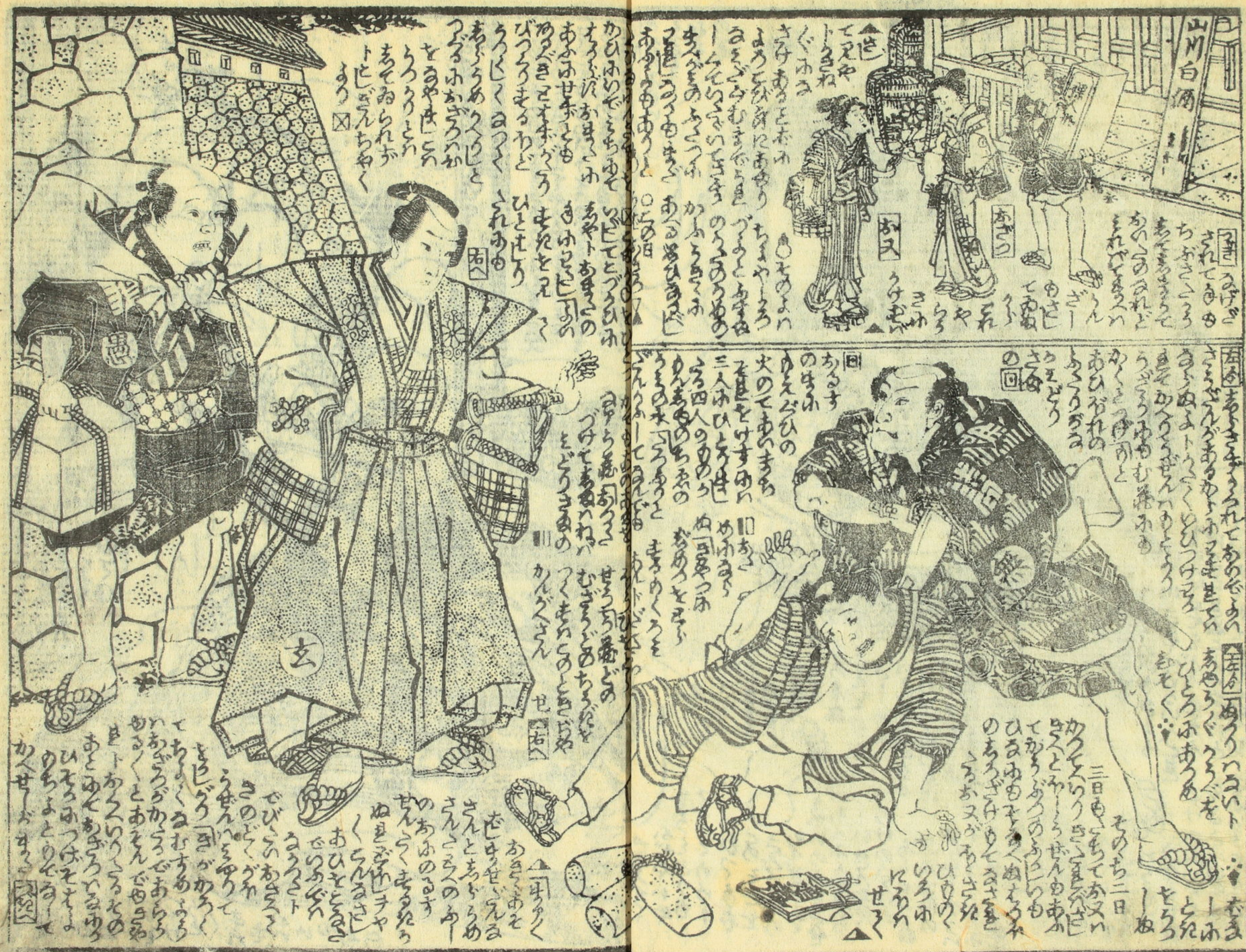
玄

愚

正ぢ死ぬとさこうりこビありさこうくうるいとおろりありもせあのとあいふぐくちふもぐ生まもあふぐのぢとものくあるくさうぐんあれいつくくいつどあまねるイヤうまれてあこあ一こい二の午まうふいくよやで三うあのうみのちさやいぬごろいの合師まいのとどりてんとまひーてさこいでぬ男いぎあのとあこことうパくさこいぬあゆまこうぐで死生まる「いやのイぐあのひぬいあいどんくトざきこちてビしちもふるやまぐ生まかどのかじもうくまとあけあとをもあめおいもぬやくあとふあきぢいビざあのこうぬざにころけてうちうくひ「そッうんーいまぐ生まぐどのうあめのビすまこやゆうあつこどりやひとビ

ぬとよもめくあいあさんまあいいてらのひあホーまくく物いきくんのことをふあひむとむぢうあなくつむふろしきのいきぐくうきもとふまこていんぐこまろやあくうこれどもまぐりさんうこえさこのぬせてこえさこビあくとビあくちーろいあやひさしいまくかこのあひく。まんむろかるくぬあいぬうぐ山々のあや〜〜くまねりまむろトのうきあひんろりあうきえうこえのいーむう石ホ女の姫ねこの兇相ちうつるうこもえくんぬいせどの戸あけてむこうろのホえこちづこひこどうて




山川白酒
お天
あぢつ
玄

ちりあくたもぐらびと
有
無

味漢三才圖會

右

有

無

玄

柳下亭種員稿
一壽齋國貞画

柳亭種彦校合

傳書 文來

七草四郎
若菜姫
志ゝ乳譚 四十五編 四十六編 四十七編 柳亭種彦作 一恵齋芳幾画

八犬傳 廿八編 廿九編 三十編 假名垣魯文録 朝霞樓芳幾画

柳春秋色櫻 近刻 山々亭有人作 一恵齋芳幾画

地本草紙問屋 深川佐賀町 廣岡屋幸助版

白縫物語

三十四編

雅員畫

國貞畫

廣岡彫梓

三十四編の下

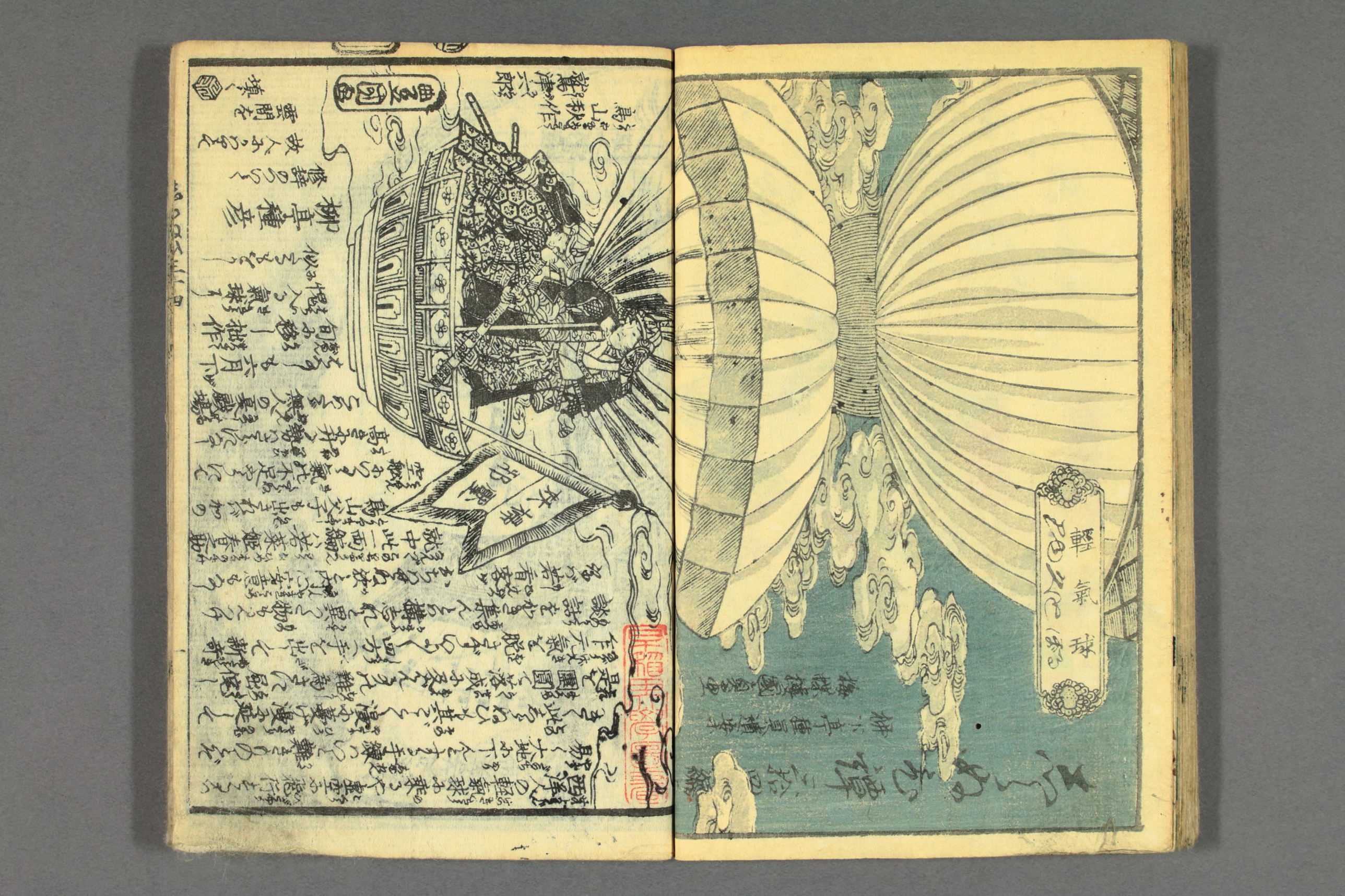
雅員化

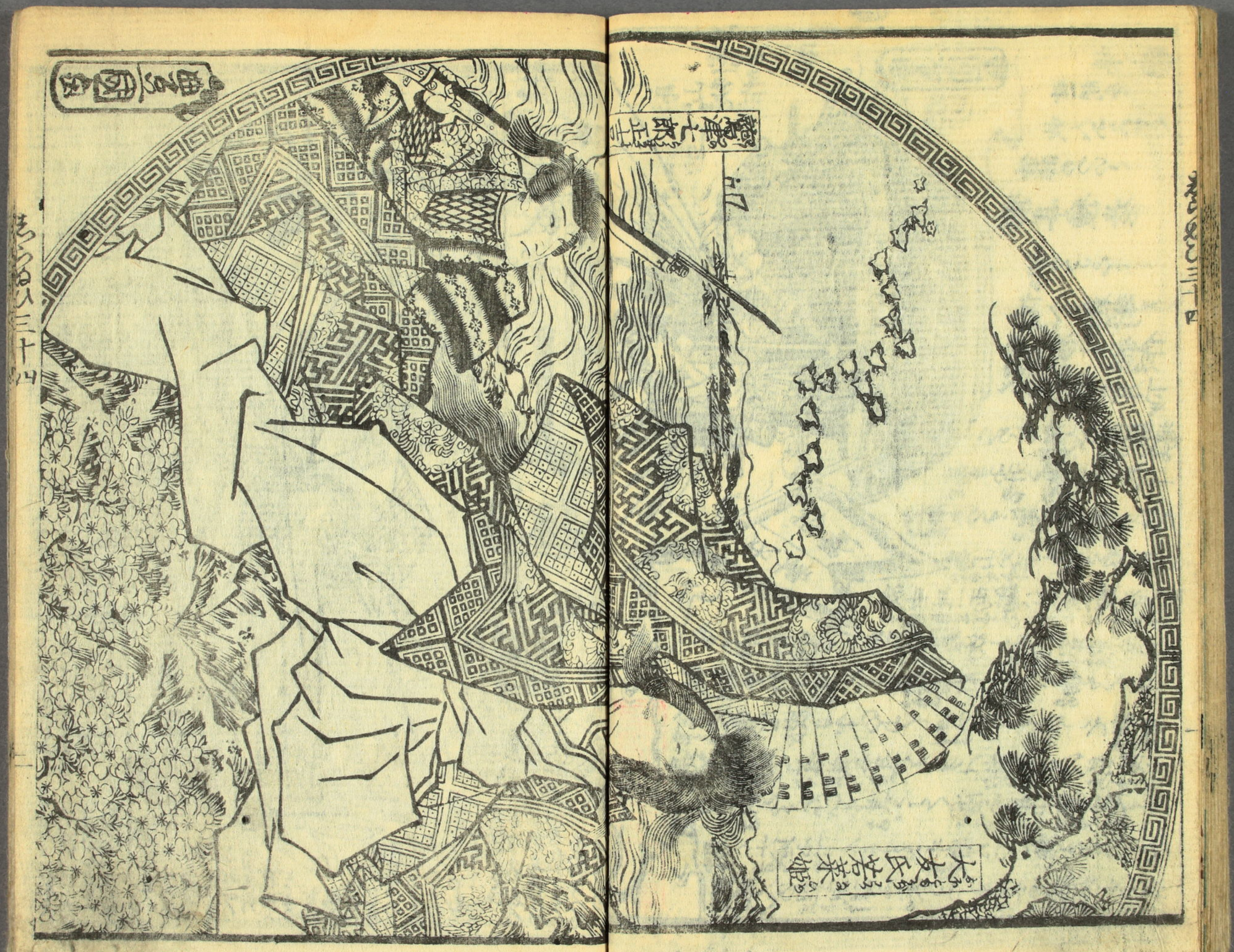
國貞画

栄壽堂

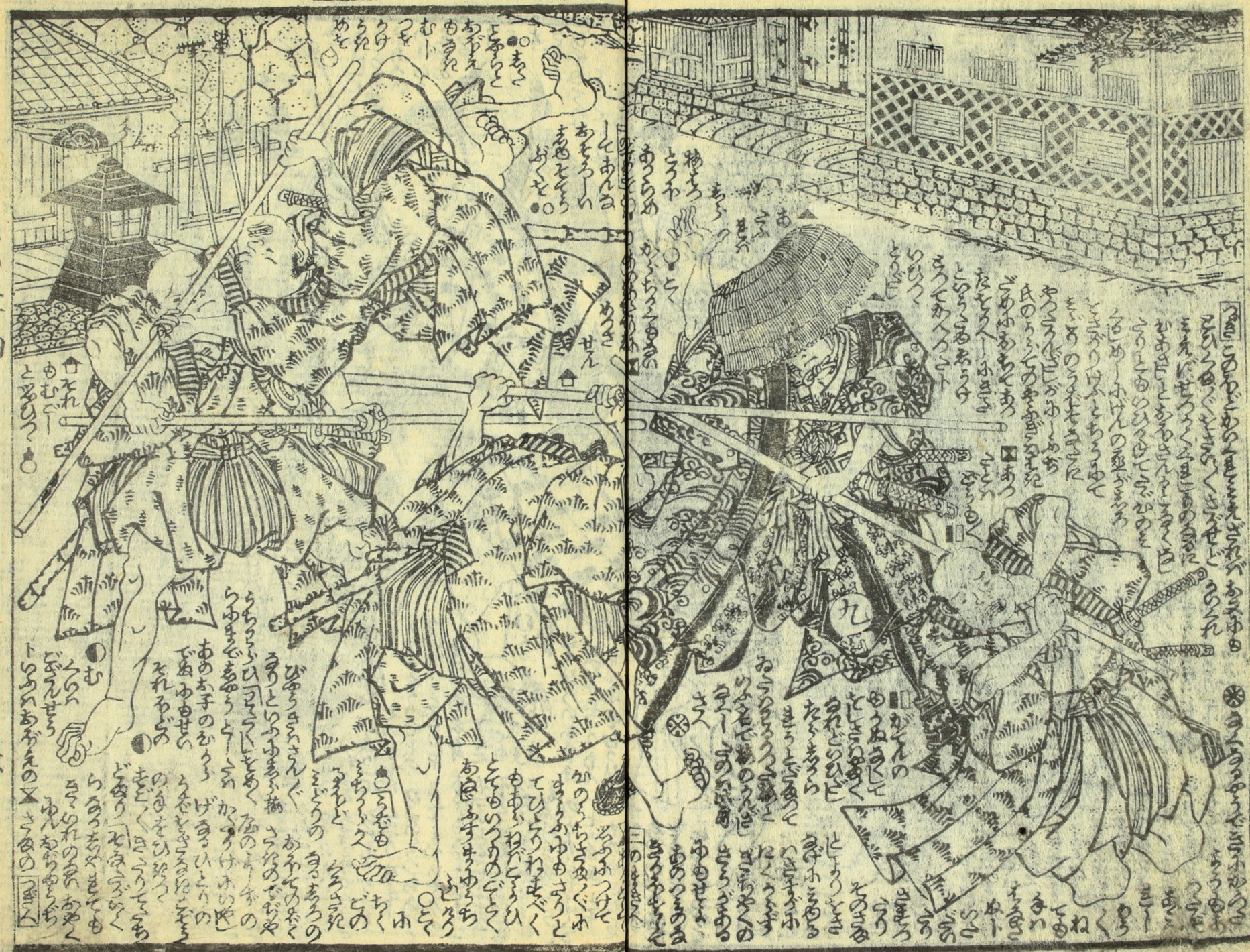
義梓

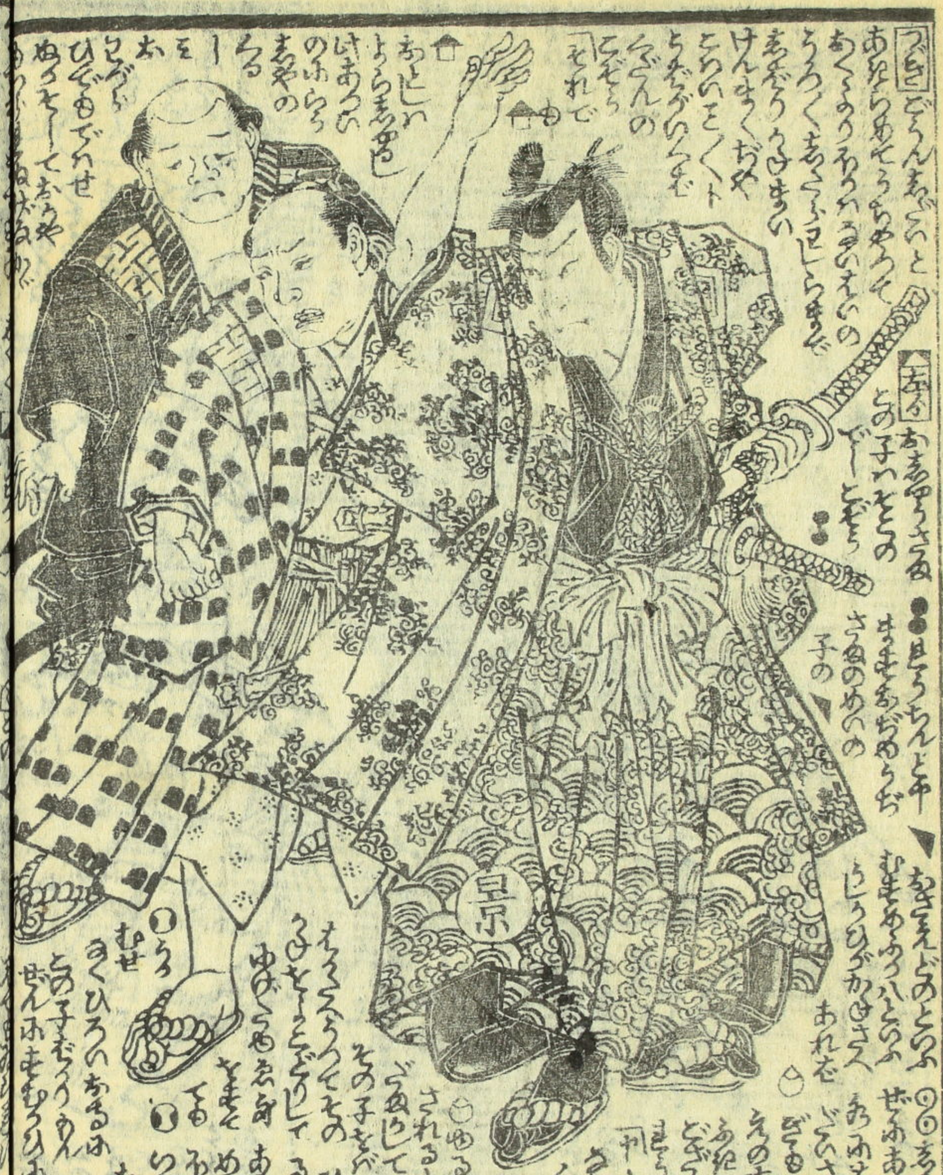
三拾四編上
廣幸版
三拾四編下
國貞画


輕氣球



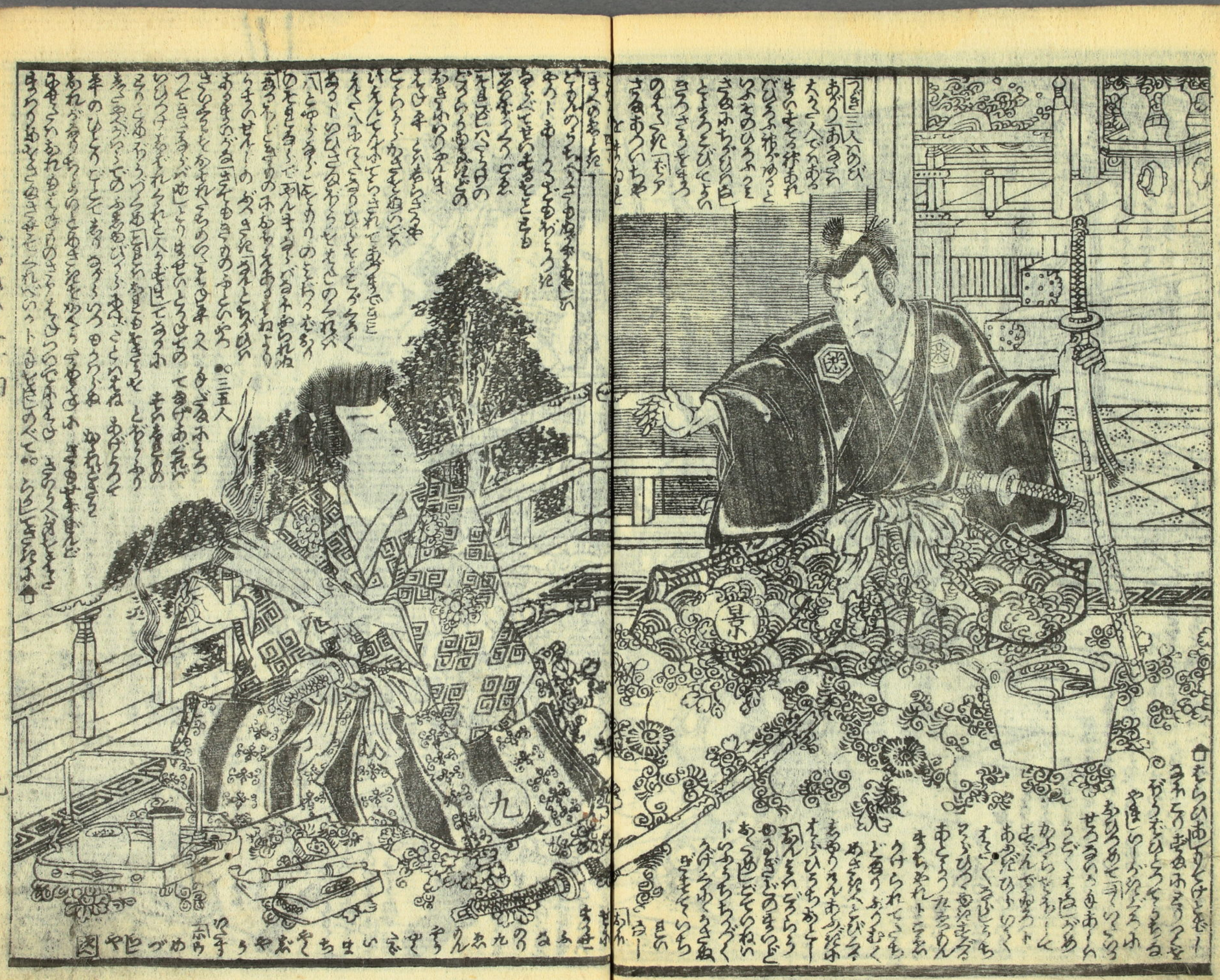
白酒
梅
玄

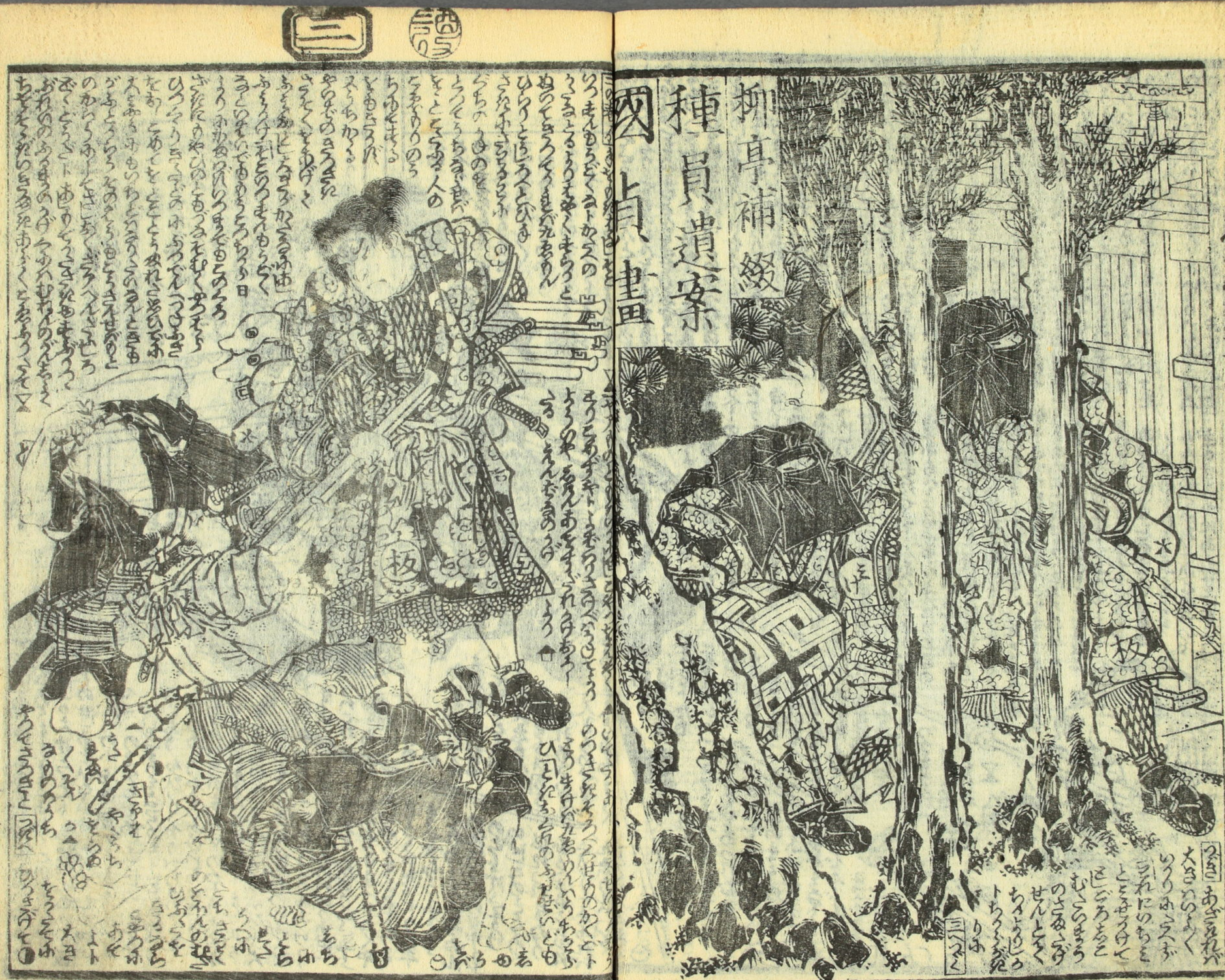


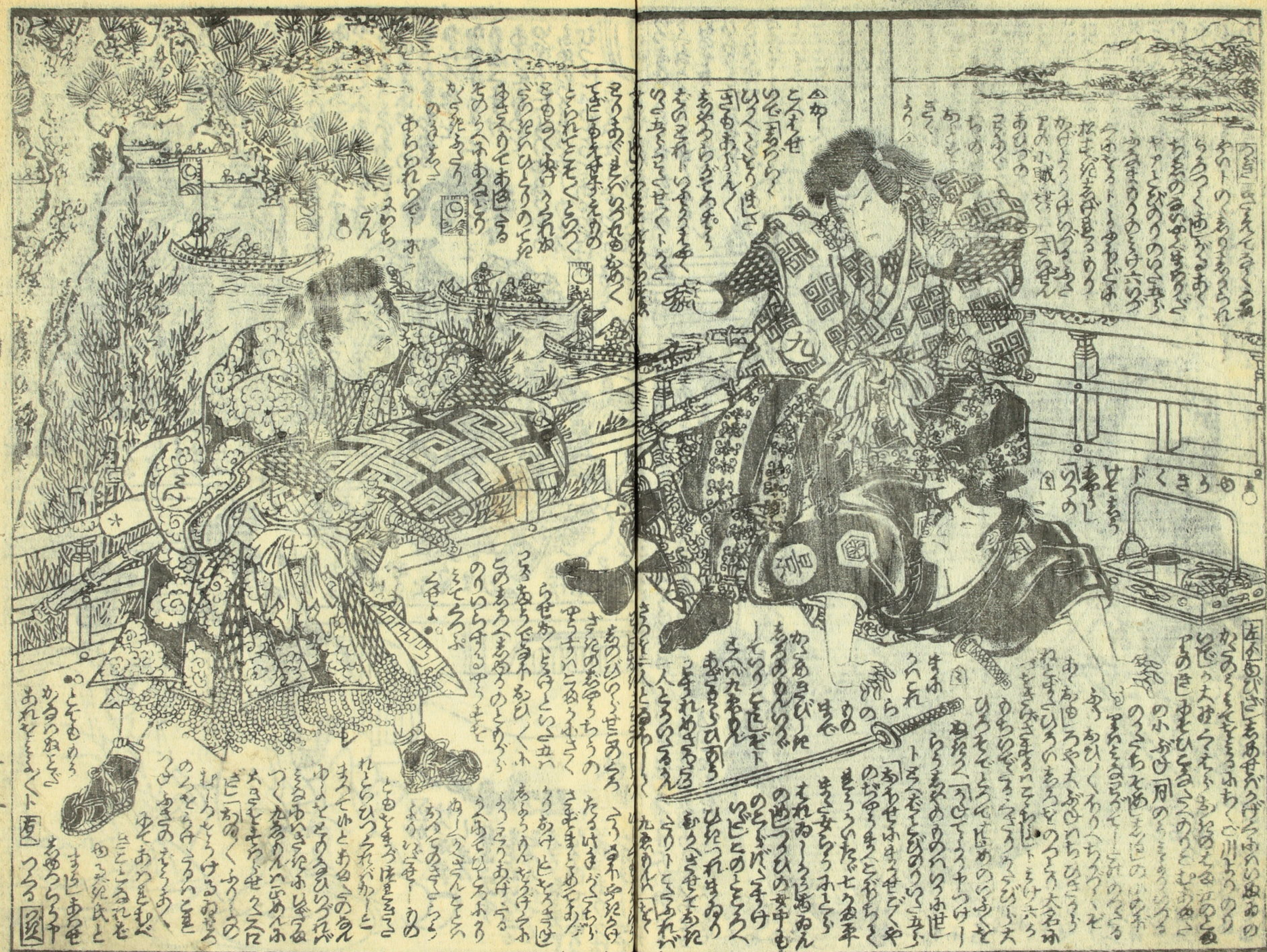

旦京

九

楽京園

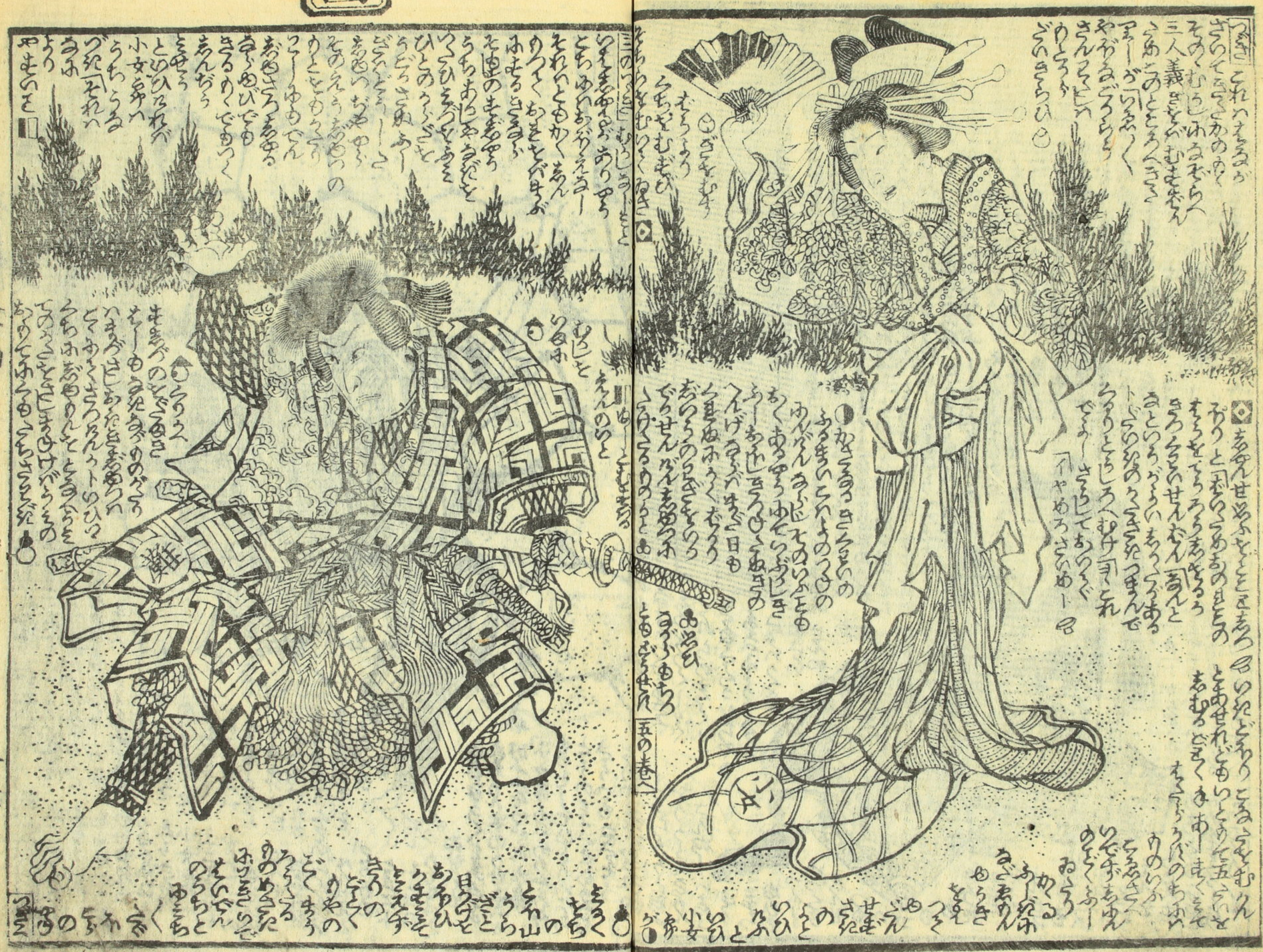

景小
九

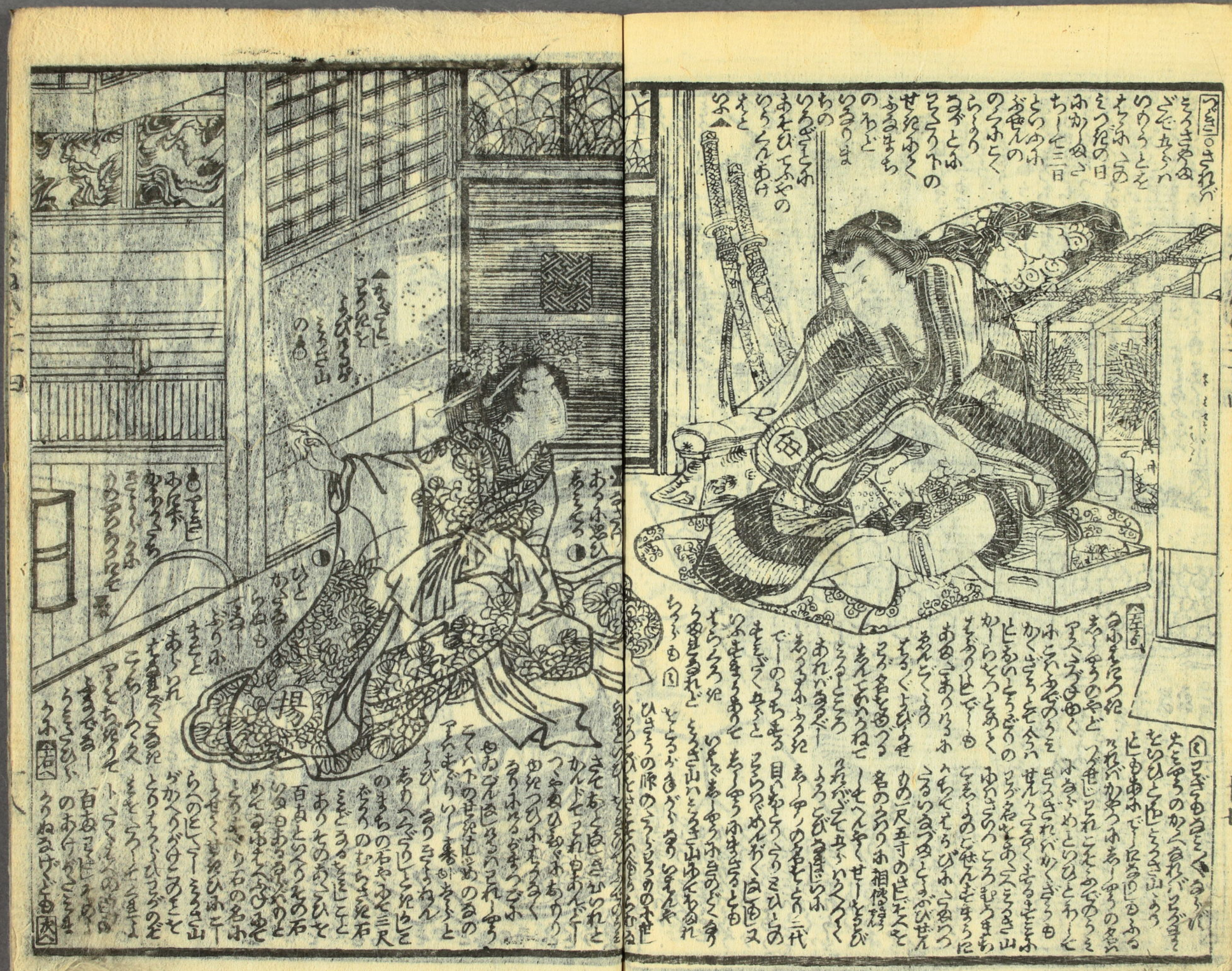




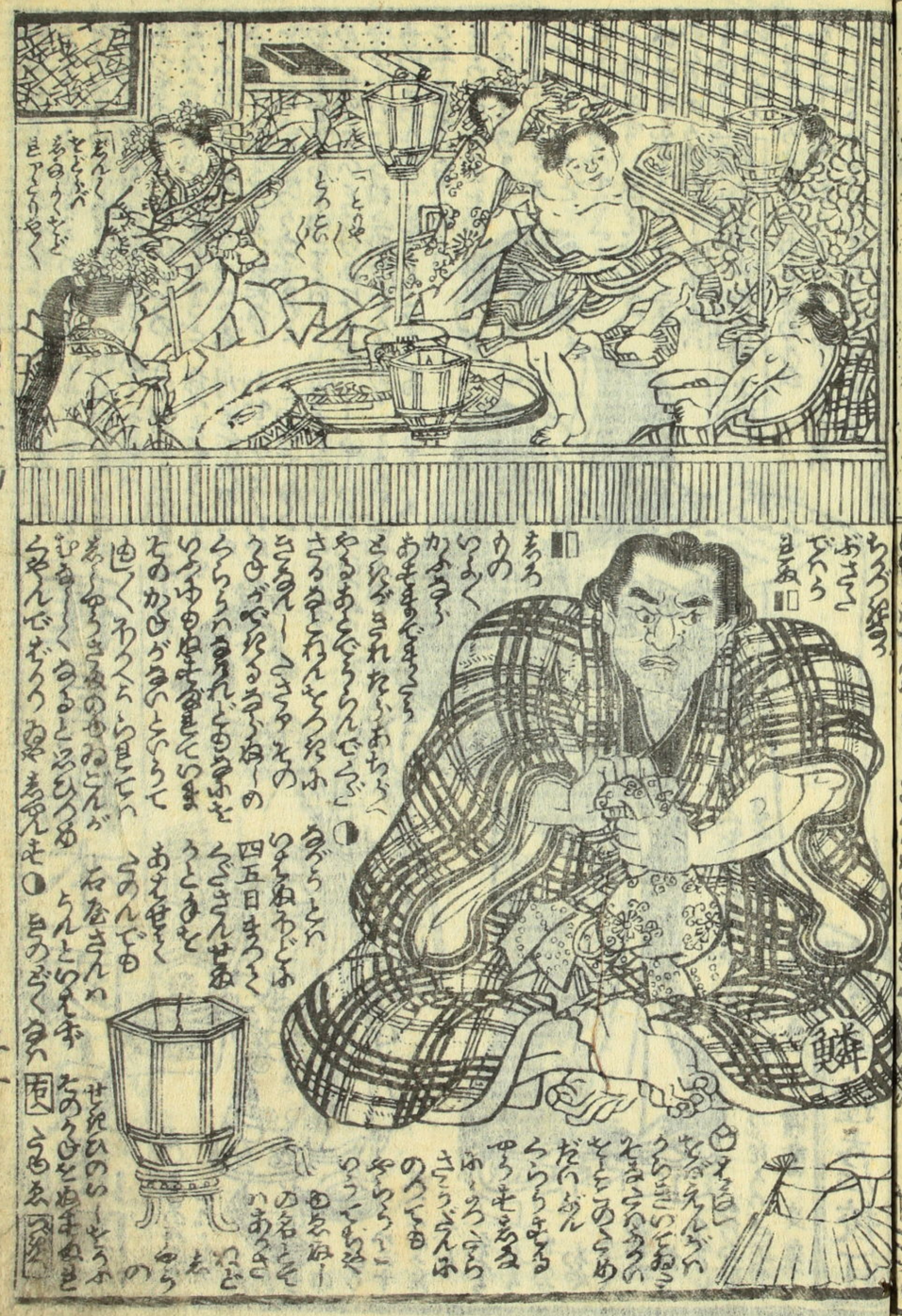
景
小女
九

九
小女

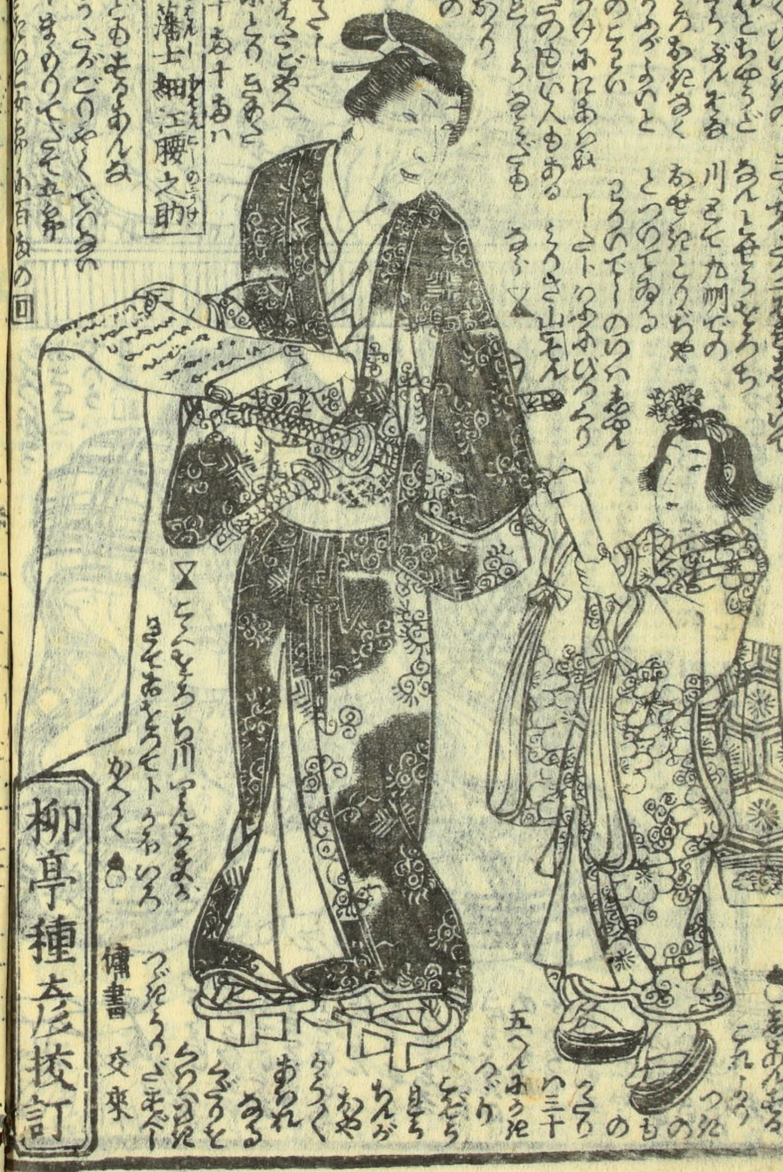

難


揚

鱗



種員稿本　國貞画圖



長府藩士　細江腰之助

柳亭種彦校訂

草四郎
若菜姫　忠義潭　四ツ五編　柳亭種彦作
四ツ六編
四ツ七編　恵齋芳幾画

のなかハ大傳　廿八編　假名垣魯文録
廿九編
三十編　朝霞樓芳幾画

二編　山ゝ言有人作
三編　恵齋芳幾画
四編　柳春秋色櫻　近刻
五編　恵齋芳幾画

地本草紙問屋　深川佐賀町　廣岡屋幸助版